

「小さな親切」運動鹿児島県本部賞

小さな親切

鹿児島大学教育学部附属中学校 一年

木下 悠太郎

「悠ちゃん、雪がたくさん積もっているよ。」南国鹿児島生まれで、雪をほとんど見たことのない私は祖母のその声に飛び起きました。毎年、雪を見たくて、年末年始の休みは長野で一人暮らしをしている祖母の家で過ごしていましたが、なぜか私が長野に行くと、いつも晴天で雪が降らず、期待外れでした。でも、昨年は違いました。「今回も雪を見ることなく、鹿児島に帰るのか」と思っていたら、天気予報が外れ、正月二日未明、雪が一気に積もり始めたのです。すぐに廊下のカーテンのすき間から外をのぞいたら、辺り一面雪景色で、とても驚きました。洗顔も忘れ、玄関に出ると、厚い雪雲のために、外は薄暗く、雪がしんとしんと降っていました。大人用の長靴を借りて雪の上を歩いてみると、ザクザクと音がし、感動しました。

すでに雪かきを始めていた祖母が、「悠ちゃんもやってみるか。」と私に声をかけました。私は鉄のスコップを持ち、雪かきのやり方を教えてもらいました。そして、「あとはやるから。」と言って、玄関前から雪かきをすることになりました。ところが、雪かきを始めてみると、鉄のスコップは長さが一メートル近くもある上に、雪は水分をたつぷり含んだボタ雪で重く、すぐに腰がくたびれました。氷点下の寒さもつらく、手を少し休めてしまいました。それでも、「せっかく雪に出会え、鹿児島では体験できない作業だから。」と思いき直し、再び重い雪を左右の脇に運び始めました。十分くらい経過し、後ろを振り返ると、自分が雪かきをし

た成果が次第に目に見えるようになり、やる気が出てきました。そして、玄関前から始めた雪かき作業は約十メートル先の道路まで進みました。「自分が汗を流して働いたから、人が道路から玄関まで入って来られるようになったんだ。」と実感でき、何となく雪かきが楽しくなってきました。私は体が温まり、寒さを忘れたのと同時に、心にエンジンがかかり、今度は道路の雪かきに着手し始めました。祖母の自宅の前だけでなく近所の家の前も含めて約三十メートルの距離の雪かきを一人で行いました。やがて、この雪かきにより新聞配達の方が道路の両脇の一軒一軒の玄関先まで入っていけるようになりました。

朝食前の力仕事にお腹も空いたので、祖母の家に帰ろうとすると、すでに自宅前の雪かきが終わっていることに気がついたおじさんが遠くから近寄ってきて、「ありがとう。」と頭を下げられました。そして、「最近、この辺は年寄りばかりなんだ。また、一人暮らしの方もいるので、とても助かったよ。」と話してくださいました。その時、私は少し恥ずかしかったのですが、何気なく自然に行った自分の行為が近所の方々のお役に立ち、本当にうれしかったです。思いもしなかったおじさんの「ありがとう。」の一言に、私は体だけでなく心も温まりました。

「審査評」

祖母の家で、念願の大雪が降ります。興味本位で始めた雪かきは、いつしか疲れも忘れさせて、近所の家の前まですすみます。雪かきをした後を見て、自分の行動が、人の役に立つことを実感できたからでしょう。そして、その行為に対して近所の人から感謝の言葉をかけてもらいます。親切とは、自ら他の人に思いをはせ、自然に行動していくことが大切だということに気付かせてくれました。

